

## 契丹の勃興期に於ける中國との關係：漢城を中心として

平島，貴義

<https://doi.org/10.15017/2335166>

---

出版情報：史淵. 53, pp.71-92, 1952-07-30. 九州大学文学部  
バージョン：  
権利関係：

# 契丹の勃興期に於ける中國との關係

— 漢城を中心として —

平 島 貴 義

唐末五代の交、契丹の一酋長より身を起した太祖阿保機は、瞬時にして部内を統一し遼帝國二百餘年の隆昌の基礎をつくつた。太祖の建國に際し漢人・漢文化が如何に與つて力あつたかに就いては、既に諸大家も多く論及されているし、漢高祖實錄・新五代史等に見える建國説話が端的にそれを示して居る。此の説話は從來遼の建國を論ずる場合には必ず問題とされて來た。今は説話の内容・今日迄の研究成果等についての詳述は略くが、結局、此れは物語・説話であつて歴史事實そのままではないと云う事に就いては異論のない所であり、唯其の説話を生ぜしむるに至つた背後の歴史事實、此の説話の中にどれ丈の史實を包藏するかと云う問題になると、諸家によつて種々異つた見解が示されて居る。従つて阿保機の據つた漢城に就いても、灤河の上源地方とする説と、上京臨潢府とする説があるが、何れにしても宋白の續通典に言う灤河の上源、今日の獨石口外の漢城を全々抹殺する事は出來ない。否此の漢城の成立は中國と契丹との交渉史上重大な意義を有するものと考ええる。此の建國説話或は夙とに東洋史家の注目を引いて居る頭下州・私城等は漢人・漢文化の契丹への流入なしには考えられない問題である。筆者は先に契丹の勃興前後に於ける中國との關係究明の前論として、太祖の奚經略に就いて考察を加えたが、本稿に於いては、更に唐末・五代初期即ち契丹勃興前後に於ける契丹と中國との關係を明ら

かにし、以て契丹勃興史ひいては滿華交渉史研究の一助とし度し。

契丹勃興前後に於ける中國と契丹との關係は、第一、唐の會昌初（八四一）から咸通末（八七三）まで、第二、光啓頃（八八五）から契丹太祖即位九年（後梁貞明元年・九一五）まで、第三、契丹太祖神冊元年（後梁貞明二年・九一六）以後と三つに分けて考察するを便利とする。又契丹への漢人・漢文化の流入には、朝貢・貿易、掠奪、中國の戰亂による漢人の契丹への亡入等が具體的にあげられる。以下第二の時期を中心に朝貢・貿易、掠奪、亡入等について考究する。

## 二

契丹の勃興は、唐の會昌初め、塞外の覇權を握り東蒙古の奚・契丹を役屬して強固な支配體制をしいて居た回紇が、キルギスに敗れ部族四散した時を以て端緒とする。それ以後光啓年間に至る迄の契丹・奚・回紇・唐をめぐる國際關係に就いては既に述べたので、<sup>註</sup>此處では更めて繰返さないが、要するに契丹は、唐の勢力不振、回紇の衰散に乗じて次第に勢力を増強し、咸通頃には契丹王習爾之の下に奚と争い此れを壓迫し、東蒙古の覇權を獲得しつつあつたのである。會昌二年幽州節度使張仲武の招撫により回紇の印に代えて大唐の印を受けてより以來の契丹と中國との關係を傳えたものとしては、

「會昌六年正月契丹遣使朝貢」（舊唐書本紀、冊府元龜・外臣部・朝貢）、「咸通末、其王曰習爾之、疆土稍大、累來朝貢。」（莊宗列傳、冊府元龜・外臣部、舊五代史・契丹傳）の二つの朝貢記事を見出すのみである。朝貢が國際親善の爲めの一手段として政治的目的を有すると同時に、それ自體が官貿易の一型態としての經濟的目的を有して居たこと、朝貢と貿易は表裏一體の關係に在り朝貢の裏には常に互市貿易が成立して居たこと等は、今更改めて繰返す迄もあるまい。而して先に見た如く、契丹の朝貢が非常に稀であり、會昌から中和迄約四十年間に僅かに數回を數えるに過ぎないことは、一見契丹と中國との交渉が極めて薄かつた様に思われるが、果してそう解釋して誤りないであろうか、當時の中國内の情況、及

び奚・契丹に對する唐朝の態度を見れば、斯く一概に解し去ることは出来ないのである。

舊唐書 卷一九 奚傳に、  
九下

故事嘗以范陽節度使爲押奚・契丹兩藩使。自至德後。藩臣多擅封壤。朝廷優容之。俱務自完。不生邊事。故二藩亦少爲寇。

とある如く。唐代、開元天寶の頃迄は幽州に治せる范陽節度使が奚・契丹の臨制を司つて居たが、肅宗の至德より後、即ち安史の亂以後唐末に至る迄百數十年の久しい間中國は藩鎮の跋扈騷亂に寧日なき有様であつた。特に藩鎮跋扈の元兇たる河朔三鎮は、憲宗の抑壓政策によつて中央の威令に服したのも束の間、又忽ちにして離反自立し、以後殆んどあたかも一獨立國の感を呈して中央の命令に服せず專横を極めた。幽州節度使は其の河朔三鎮の一である。一方唐朝でも憲宗以前の幽州回收方針を放棄し、強いて回收することに力めず、文宗の太和五年、宰相牛僧孺（註）も云える如く、巨額の費を投じて幽州を回收するより寧ろ此れを放置し、獨力で奚・契丹等の防禦の任に當らせる事を得策とした。故に奚・契丹の朝貢の如きも幽州節度使の意向に依つて自由に裁量せられて居たものと解される。此れが亦唐末に於いて奚・契丹に關する記事の少い所以でもあつた。然りとすれば、契丹の朝貢は單に此の數回に止らず實際幽州に來たものは更に多かつたと斷じて誤りあるまい。勿論、兩者の中間に居て交通路をおさえて居た奚が契丹・唐に抗して勢力盛んであつた咸通頃迄は、契丹の朝貢も相當不自由なものであつたには相違ないが、單に數回と云ふ僅かな回数に限定することは當を得たものではあるまい。更に同書に續いて、

其每歲朝賀。常各遣數百人。至幽州則選其酋長三五十人赴闕。引見于麟德殿。賜以金帛遺還。餘皆駐而館之。率以爲常。

とある如く、奚・契丹の朝貢には普通數百人の者が幽州に來り、幽州節度使は彼等を幽州に駐せしめ、其中の酋長三・五

十人を選んで京師に赴かしめて居た。朝貢團の大部分の者は幽州に止つて居たが、彼等は必ずや幽州に於いて貿易し、又其目的を以て來つたものに相違ない。

以上によつて、會昌から中和迄の約四十年間、契丹で云えば屈戌↓習爾之迄は契丹の朝貢回数は記録に残つて居る以外に相當多かつたこと、朝貢團は數百人の多きに上りそれが又幽州に於いて貿易して居たのであろう事等を知り得るのである。然しだからと云つて此の間中國と契丹との交渉が頻繁で、漢文化の流入も盛んであつたと云うのではない、寧ろどちらかと云えば他の前後の時代に比して少かつたと見るのが妥當であらう。

## 三

習爾之に次いで契丹王となつたのは欽徳である。(遼史の痕德董可汗、彼は遼史によると唐の天復元年に契丹可汗の位に即いた様になつて居るが、此れは遼史の作爲であること既に指摘せられた如くである)。舊五代史卷一契丹傳には

光啓中。其王沔丹(欽徳の改譯)者。乘中原多故北邊無備。遂蠶食諸郡(莊宗列傳には郡を部とす)。達怛・奚・室韋之屬咸被驅役。族帳寔盛。有時入寇。

とある如く、彼は光啓中(八八五〜七)には契丹王であり、其の隣接諸民族を役屬して次第に強盛になり、遂には中間の奚を壓服して中國の北邊に姿を現して時折入寇して居たことを傳えて居る。當時中國に於いては、王仙芝・黃巢の約十年間の騷亂の後、中和四年(八八四)黃巢の賊平ぎ、翌光啓元年僖宗長安に還つたが時已に藩鎮各地に割據し大小群賊の跳梁甚しく、唐朝は僅かに長安に餘喘を保つに過ぎなくなり、契丹・奚との交渉は全く北邊の藩鎮に歸して了つたのである。北邊の藩鎮で契丹と關係の深かつたのは(海上よりの梁・南唐等の交渉は除く)幽州盧龍節度使と河東(太原)節度使であつた。以下それ々の契丹との關係について詳述する。

跋扈藩鎮の元兇河朔三鎮の一なる幽州節度使は、先に奚・契丹の征伐に大功あつた張仲武に次いで、張直方↓周琳↓張允伸↓張公素↓李茂勳↓李可舉↓李全忠↓李匡威↓李匡籌が立ち、次いで劉仁恭が藩帥となつた。舊五代史契丹傳に契丹王欽徳が立ち次第に強盛に赴き時折入寇したと傳えられる光啓中から劉仁恭が立つ迄は、中國、契丹の兩方の史料には契丹入寇の形せきは殆んど見出せない。或は記録もれかも知れないが、たとへ入寇があつたとしても北邊を騒がす程のものではなかつたであらう。乾寧元年（八九四）劉仁恭は李克用に従つて幽州節度使李匡籌を攻め、翌二年正月幽州を陥れ二月に盧龍留後七月には節度使となつた。舊五代史契丹傳は光啓中の記事に續いて、

劉仁恭鎮幽州。素知契丹軍情僞。選將練兵。乘秋深入踰摘星嶺討之。霜降秋暮即燔塞下野草以困之。馬多饑死。即以良馬賂仁恭。以市牧地。仁恭季年荒恣出居大安山。契丹背盟數來寇鈔。時劉守光戍平州。契丹實里（舍利）王子率萬騎攻之。守光僞與之和。張幄幕于城外以享之。部族就席伏甲起擒實里王子入城。部族聚哭。請納馬五千以贖之。不許。沁丹乞盟納賂以求之。自是十餘年不能犯塞。

とある。此の舊五代史の記事に就いては通鑑考異以來種々の疑問異説がある。此のA・B・Cの記事が劉仁恭一代の事件を繫年を明確にせずして列記したものであることは明らかであるが、（通鑑は光啓中を最後までかけて解釋している様である。）註乾寧二年より天祐三年迄の十餘年間のうち何時であるかに就いては検討を要する。先づ、(A)について見れば、舊五代史卷一劉守光傳註に

乾寧三年。羅宏信背盟。武皇遣李存信攻魏州。徵兵于燕。仁恭託以契丹入寇。俟敵退聽命。

とある如く、契丹の入寇は仁恭が幽州に鎮するや間もなく行われて居た様であり、(A)はその頃、即ち乾寧頃の事件であると推測される。次いで(B)には仁恭末年荒恣出でて大安山に居るとある。彼は光化二年（八九九）二月魏博を兼併せんとして十萬の兵を以て進撃したが汴軍に破れ、此れより其勢漸く不振に陥つた。天祐三年頃には政を亂り大安山に居たことが

見える。<sup>註9</sup> 又遼史<sup>卷</sup>一太祖紀によると、天祐元年（九〇四）九月、二年十月、三年二月と三回に亘つて劉仁恭と交戦の事が見える。故に(B)は天祐二年前後の事と考えて誤りあるまい。次に(C)に就いては二説がある。第一は(A)に續く事件で仁恭の勢力衰えざる光化二年以前とする説、第二は(B)の直後の事件として天祐三年頃とする説である。此の二説の是非を決定する確定的な論據は見出せないので疑を存し、今しばらく前者に従つておく。<sup>註11</sup>

以上によつて知り得る事は、劉仁恭幽州に鎮するや、契丹軍の内情を熟知し、積極的に古北口外の摘星嶺を越えて契丹を討つて此れを苦しめ、よくその入寇を絶ち、又平州に於いては侵入の實里王子（述律阿鉢）を擒にする等保境安民の實をあげ、契丹又敢て入寇しなかつたのである。然るに仁恭は光化二年頃より勢衰え、末年になると政治を顧みず苛斂誅求を事とし逸樂にふけり、子供の守光とも離叛した。一方、契丹に於いては、天復二年（九〇二）于越總知軍國事となつて契丹の兵馬の大權を掌握した太祖阿保機は、攻撃の主鋒を轉じて山後方面を伺いはじめた。後述する如く天復二年、三年と代北の地に侵入し、薊北をかすめ、遼史によれば、天祐元年九月黑車子室韋を討たんとするや、仁恭其側面を衝かんとして武州に至つたが却つて契丹に破れ、翌二年太祖は李克用と同盟を結んだ勢に乗じて進んで仁恭を討ち數州（恐らく武媯等の州を指すものであらう）を抜き盡く其民を徙し、又翌三年仁恭を討つて居る。<sup>註12</sup> 斯くの如く契丹の劉仁恭攻撃は仁恭の末年天祐二・三年頃になると漸く積極化して來た。翌天祐四年（後梁開平元年・九〇七）遂に劉守光は劉仁恭を幽閉して自ら幽州節度使となり、契丹の太祖又契丹可汗として第一次の即位を行つた。以後の契丹と幽州との關係を遼史太祖紀によつて表示すると次の如くなる。此の遼史の記事は中國側の記録と相當食違つて居るから、中國側の記録と比較對照して檢討する必要がある。開平元年の平州刺史劉守奇の契丹奔入は資治通鑑<sup>卷二</sup>六六開平元年三月の條に

守光弟守奇奔契丹。未幾亦奔河東。

とある。守光の兄は弟とす可きであらう。守奇は平盧城（營州）に置かれたが間もなく河東に奔り仁恭攻撃に参加し、更

契丹		中 國		西 紀	記 事
年	號	年	號		
即位元年	開平元年	九〇七	四月。劉仁恭子守光囚其父。自稱幽州盧龍軍節度使。 七月乙酉。其元平州刺史守奇率其衆數千人來降。命置之平盧城。		
二年	二年	九〇八	八月壬子。幽州進合歡瓜。		
三年	三年	九〇九	三月滄州節度使劉守文爲弟守光所攻。遣人來乞兵討之。命皇弟舍利素夷離董蕭敵魯。以兵會守文於北淖口。進至橫海軍近淀。一鼓破之。守光潰去。因名北淖口爲會盟口。 五月甲申。置羊城于炭山之北。以通市易。		
五年	乾化元年	九一一	三月。次灤河刻石紀功。復略地薊州。 八月甲子。劉守光僭號幽州稱燕。		
六年	二年	九一二	二月戊午。親征劉守光。三月至自幽州 七月。命弟刺葛分兵攻平州 十月戊寅。刺葛破平州		
七年	三年	九一三	正月。晉王李存勗拔幽州擒劉守光。		

に於て奔つて居る。<sup>註13</sup>三年の遼史の記事は、契丹の太祖、劉守文の請に應じて横海軍（滄州）の近淀に至り守光を破つたと云うが、資治通鑑<sup>卷二</sup>六七開平三年五月及び舊五代史<sup>卷一</sup>三五劉守光傳によると、守文重賂を以て契丹・吐谷渾の衆を招き雞蘇（蘇州）に戦い守光を破つたが、後却つて守光に滄州にて破られ遂に殺されるに至つて居る。松井氏も云われる如く、<sup>註14</sup>守文契丹を招き契丹又此れに應じたのは事實であるうが、遼史に見える如き交戦の結果は疑問とす可きである。五年正月太祖

は、長城内の所謂山後の地方に遷徙した西部奚が劉守光に頼つて叛服常なかつたので此れを討ち平げ、更に進んで東部奚を討ち、盡く奚嚮の地を收めたが、三月瀋河に功紀して薊州を攻略した。遼史卷七蕭敵魯傳に、

太祖征奚及討劉守光。敵魯略地海濱。殺獲甚衆。

とある。即位四年北府宰相となつた敵魯は、太祖の進撃に應じて、先に守光に擒にされた宿怨地海濱（平州附近）を攻略した。資治通鑑卷二乾化元年八月（舊五代史卷一劉守光傳）の條に、

八月。（燕王守光稱帝）……受冊之日。契丹陷平州。燕人驚擾。

とあるのは此れに應ずるものである。次に即位六年二月戊午の太祖の劉守光親征、七月（六月）の刺葛の平州攻略は如何。

河東の李存勗は乾化元年（太祖即位五年・九一一）より頻りに幽州方面に兵を出し、翌二年正月には其將周德威は幽州城下に迫つた。舊五代史卷一劉守光傳に、

十二月（乾化元年）。莊宗遣周德威出飛狐。會鎮定之師。以討之（守光）。德威攻圍歷年。屬軍皆下。守光堅保幽州求援于梁。北誘契丹。救終不至。

とあつて、守光が周德威に幽州を圍まれるや汴と契丹に救を求めたことを述べて居る。資治通鑑卷二乾化二年の條には、正月周德威飛狐口を出て進撃し、戊子には涿州を圍み、丁酉幽州城下に至つたことを述べて後、

守光來求救。二月帝（朱全忠）疾小愈。議自將擊鎮定以救之。……（梁軍大敗す）。……

とあるから。守光が契丹を誘つたのも乾化二年のはじめ頃である。此の時の使者が韓延徽なることは後述する。而して契丹の援軍は遂に至らなかつた。丁度此の頃即位六年（乾化二年）二月太祖親ら劉守光を征し幽州に至つたと遼史は記して居るが、太祖の軍が幽州に至つて居れば「救終不至」等と記す筈はないのである。此の「太祖至自幽州」というのは遼史の誇張であると考えるのが妥當であらう。然しだからと言つて此の即位六年の遼史の記事を全々否定は出來ない。資治

通鑑卷二 六八 乾化三年三月（舊五代史卷七 〇 元行欽傳）の條に、

燕主守光命大將元行欽。將騎七千牧馬山北。慕山北兵以應契丹。（胡註）劉守光求救於契丹。故使元行欽募兵於山北以應之。

とあり、同じく通鑑同年同月の條に晉將が古北口を陥れたことが見えるが、註此等は契丹軍の何等かの動きを思わせる。更に、舊五代史卷一 三七 契丹傳に、

劉守光末年苛慘。軍士亡叛皆入契丹。洎周德威攻圍幽州。燕軍民多爲所寇掠。

とある如く、太祖は晉燕の交争による混亂に乗じて、北邊に侵寇し、多くの軍民を掠抄し去つたものと考えられる。即ち遼史の記事は誇張されては居るが、此の事を裏書きするものと見られ、契丹軍侵入の事實は認む可きである。かくて翌七年十月遂に劉守光・仁恭は李存勗に捕えられて殺され、幽州盧龍軍の巡屬は悉く晉王の手に歸し、幽州には攻軍の將周德威が鎮する事となつた。

以上を要するに、劉氏は即位元年より滅亡迄、兄弟の内訌と西方晉の攻撃に依つて安徐たり得ず、長城の堅壁の守りも弛緩し、遂に契丹に救援を求むる事數回、契丹に對しては常に和平の態度を取つて居た様である。即位二年の幽州の進奉。三年の榷場の設置はそれを示す。一方契丹は劉氏への舊怨をはらす可き絶好の機會に恵まれながら、敢えて深く侵入し燕の招きに應じてこれを救おうとはせず、却つて晉燕の攻撃・内訌に乗じて、専ら實利に就いて邊郡をかすめ、中國の文物、漢人の掠奪を計り、或は貿易の利を占めて居たものと解せられる。

#### 四

幽州の劉氏と並んで契丹と最も關係の深かつたのは、河東（太原）節度使李氏（克用・存勗）である。李克用は沙陀族の人、中和元年唐朝の招きに應じて黃巢討伐に従い、沙陀の精兵を以て黃巢を破り、功によつて河東節度使に任ぜられ

原に鎮する事となつた。以來、帝業の地太原に據り、藩漢の精兵を率いて中原を雄視し、汴の強藩朱全忠と覇を争い。幽州とも相敵視して居た。

さて、契丹と李克用との交渉は、中國側の記録によると有名な雲中の會盟を以て嚆矢とする。<sup>註18</sup>然るに遼史<sup>卷一</sup>太祖紀には（天復元年）冬十月。授大遼烈府夷離婁。明年秋七月。以兵四十萬伐河東・河北。攻下九郡。獲生口九萬五千、駝馬牛羊不可勝紀。九月。城龍化州于潢河之南。始建開教寺。明年九月。復攻下河東・懷遠等軍。十月。引軍略至薊北。俘獲以還。

とある。此れによると太祖は天復二・三年に大規模な河東侵入を爲し更に薊北をも侵して居る。此の遼史の記事は文字通り受取つていかどうか検討を要する。先づ田村氏も云はれる如く河東・河北は河東・代北の誤りであろう。天復二年の河東・代北の侵入記事について疑問となるのは、第一、中國側の記録に全然此れに相應する記事がないことである。四十萬の大軍を以て河東・代北に侵入し九郡（州）を下し、九萬五千人を俘獲したとあるが（九州は何れを指すか不明）、内・外の長城線を越えて河東・代北に攻入り九萬にも餘る漢入を俘獲したとすれば、河東に鎮して居た李克用の側に何等かの影響があり、如何に唐末の記録が散漫であるとは云え其の形せきが見出せない筈はないのである。次に當時は現在の商都附近を中心とする黒車子室韋<sup>註20</sup>の勢力は嚴然として居たから太祖の通路を阻む可能性がある事等である。然し遼史太祖紀の記事も遙輦氏傳説以外は信憑性が大きく、遼史<sup>卷三</sup>地理志・上京道・龍化州の條には、

唐天復二年。太祖爲迭烈部夷離婁。破代北。遷其民建城居之。……

とあつて、龍化州の漢民が太祖の天復二年の代北侵入によつて得たものであると傳えられて居るし、遼史<sup>卷三</sup>兵衛志上の序文にも、

十一年（遙輦耶瀾可汗）。總兵四十萬。伐代北克郡縣九。俘九萬五千口。

と見えている以上（遙鞏耶瀾可汗の十一年の事となつて居るが、遙鞏氏は全く遼史の作爲にかゝるものではあるが、遙鞏氏と云われるものの勢力は遼代を通じて特に遼初に於いては太祖一族に對抗する勢力として嚴存して居た<sup>註21</sup>）此の記事を抹殺する事は出来ない。又天復二年から三年後には太祖と克用の雲中の會盟があり、新唐書<sup>卷二一八</sup>沙陀傳には、

克用願藩鎮皆附汴。不可與共功。惟契丹阿保機尙可用。乃卑辭召之。

とある如く、當時の契丹は中央の汴に對抗せんとする克用が辭を低くして召して力を借りねばならぬ程の勢力を有し、河東の克用に取つては強力な存在であつた事よりすれば、三年前の太祖の侵入もあり得る事である。所で注意す可きは先の龍化州・兵衛志の記事には代北とのみあつて河東がないことである。（遼史で使用されている「代北」は内長城と外長城にかこまれた山後の地を指している様である）。更に龍化州龍化縣の戸數は遼の盛時に於いて一千戸である。大まかな計算ではあるが、それから女直の三百戸を引けば漢戸は七百、以後（燕薊より）の徙民・自然増殖を考慮に入れば、天復二年當時の戸數は多くとも五百戸を越すことあるまい。假りに一戸五人として二千五百人となる。勿論此の時の俘民が龍化州のみに徙されたとは限らぬが、それにしても九萬五千口は多きに過ぎる。又雲中の會盟の時の太祖の兵三十萬（遼史には七萬）、神冊元年の大舉侵入の時の三十萬（これも實數ではなかつたろうが）等の兵力を考えると總兵の四十萬は過多である。此等の點と先述の劉仁恭との關係に於いて見た如き遼史太祖紀の誇張を考え合せると、即位以前の太祖紀の記事は、侵入の事實はあつたとしても、多分に誇張して記されて居ると斷ずるを得よう。恐らく、天復二年三月汴軍に晉陽を圍まれた克用の勢力不振に乗じて北邊を侵したのではあるまいか。更に明年（天復三年）九月の記事も同斷である。十月の薊北の掠略は九月の掠略の歸途山後の地を侵したものの如くである。

次いで李克用・阿保機の雲中の會盟となる。會盟の時期に就いては、天祐元年、同二年、同四年の諸説あり、小川氏は天祐元年五月（八月<sup>註</sup>）、松井氏は天祐四年説を採つて居られるが、今は天祐元年説に従う。會盟の事情については、新唐書

卷二 一八 沙陀傳には先に引用せる文に續いて、

保機身到雲中。與克用會。約爲兄弟。留十日去。遣馬千匹牛羊萬計。期冬大學度河。

と云い克用が太祖を召したとし、此れに反し、舊五代史<sup>卷一</sup>契丹傳には、

天祐四年大寇雲中。後唐武皇遣使連和。因與之面會雲中東城。大具享禮。延入帳中。約爲兄弟。謂之曰「唐室爲賊所

篡。吾欲今冬大舉。弟可以精騎二萬同收汴洛。」阿巴堅許之。

とあり、契丹の大舉侵入によつて之と和し會盟した如く傳えて居るが、此れは克用が契丹の力を借らんとして自ら招いたとする方が妥當であろう。克用は天復二年汴軍に攻められ晉陽に圍まれた時も「不若且入北虜。徐圖進取」<sup>十</sup>と議したが李嗣昭・劉夫人に諫められ止んで居る。會盟の目的とする所は汴の朱全忠を討たんとして契丹の力を借るに在つた如く中國側の史籍は傳えているのが、遼史<sup>卷一</sup>太祖紀によると、

唐河東節度使李克用遣通事康令德。乞盟。冬十月。太祖以騎兵七萬會克用于雲州。宴酣克用借兵以報劉仁恭木瓜澗之役。太祖許之。易袍馬約爲兄弟。

とて、契丹側では會盟の目的を幽州の劉仁恭挾撃に在つたとして居る。克用としては其の終局の目標は汴の朱全忠攻撃に在つたであろうが、幽州も又弱敵ではなかつた。乾寧四年木瓜澗に於いて劉仁恭（克用の部將で幽州に鎮せしめられるや忽ちにして叛旗を翻した）に大敗した事は怨骨髓に徹して居たであろうし、遺言に一矢を授けて「劉仁恭を討て汝先づ幽州を下さずして河南は未だ圖る可からざる也」と云い。資治通鑑<sup>卷二</sup>六八 乾化元年二月の條にも

諸將曰「……不若先取守光。然後可以專意南討」王（李存勗）曰「善」

とある如く、河東としては先づ幽州の地を取つて宿敵汴に向わんとした決意が見えて居る。仁恭攻略も會盟の大きな（特に眼前の）目的であつた筈である。契丹の太祖としては、前回の幽州侵入に劉仁恭に苦められ失敗を繰返し、漸く仁恭の

西北邊を伺わんとして居た時であるから、正面の宿敵劉仁恭の攻略を企圖して居たに相違ない。汴の朱全忠の攻撃等は殆んど考慮外だつた様である。

さて、李克用は天祐五年（開平二年・九〇八）正月病を得て歿し、其長子李存勗が嗣立したこれが後唐の莊宗である。克用の歿するに當り、次の如き逸話を五代史闕文（舊五代史卷二六）武皇紀割註）は傳えて居る。

武皇臨薨。以三矢付莊宗曰「一矢討劉仁恭。汝不先下幽州。河南未可圖也。」一矢擊契丹。且曰「安巴堅與吾把臂而盟結爲兄弟。誓復唐社稷。今背約附賊。汝必伐之。」……

即ち克用は契丹が雲中の盟約に背いて汴に附したことを怒り、深く契丹を怨み、遺言して莊宗に契丹を討つ可き事を誓わせて居る。此れを見れば開平二年以後、契丹と河東との間の交渉は閉ざされて居た様に考えられるが、通鑑卷二六六開平二年正月の考異にも云える如く「後人因莊宗成功。撰此事。以誇其英武」らんとしたのであろう。李存勗も無理に事を構え契丹に背後をおびやかさるよりは、契丹とは和平を保ち先づ幽州を討つて汴に對する態勢を固めんとしたと思われる。事實、遼史太祖紀即位二年正月の條には、

河東李克用子存勗襲。遣使弔慰。

とあり、舊五元史卷一三七契丹傳に、

莊宗初嗣世亦遣使告哀。

とあつて、開平二年には使節の往來あり。舊五代史卷一三七契丹傳には續いて、

賂以金緡求騎軍。以救潞州。答其使曰「我與先王爲兄弟。兒即吾兒也。寧有父不助子耶。」許出師會潞。平而止。

とある如く、存勗は契丹に反抗せざるのみか却つて金緡を賂して契丹騎軍を迎えんとし、太祖又出兵を約して居る。此れによつても解る如く、會盟以後太祖は約に背いて汴に通好し、封冊を受けんとして盛に使臣を送つて居たにも拘らず、契

丹と河東の李氏との間は圓滑であつたのである。それ以後太祖即位九年・後梁の貞明元年(九一五)の幽州軍校齊行本の契丹奔入頃迄約七年間、兩者の交渉記事は見出せないが、恐らく其關係は引續き圓滑に行われていたと見て大過あるまい。

幽州節度使劉仁恭は李克用に背いて自立態勢を取り木瓜澗の役に克用を破つて以來、或は雲州を伺い或は易・定方面を攻め、一時は和解に至ることもあつたが、それは權謀術策に過ぎず、守光の將孫鶴註26も「太原窺吾西、契丹伺吾北」と恐れ、又存勗の諸將の言にもある如く、結局所詮は激烈な併呑戰を演ず可き運命に在つた。乾化元年十一月の劉守光の易・定攻撃に端を發し李存勗の幽州攻略戰は展開せられ、遂に三年十月幽州の巡屬十二州悉く晉の有に歸し、同年十二月功將周德威、盧龍軍節度使となつて幽州に鎮した。斯くて晉は東は滄關より西は雲・豐州に至る長大な長城線を以て契丹と相接するに至つた。時に契丹に於いては太祖の即位八、九年の交に當る。太祖は即位五年より勃發した諸弟及び其背後に在る強力なる契丹諸酋の亂を平げ、隣強諸族・奚・烏古・敵烈・室韋等を壓服し、小部族を役屬して内部態勢を固め、堂々中原に對する無封冊國家として神冊註27と建元し、積極的中國侵入を開始した。晉王又燕を平げ、梁を壓し、倍舊の固めを以て此れに對抗したのである。神冊元年(後梁・貞明二年・九一六)。七月太祖は吐渾・黨項等西方を親征し、餘勢をかつて三十萬の(百萬と稱する)大軍を以て蔚・新・武・媯・儒等の州に侵入した。以後、契丹の侵入は中原の財寶・人民を目指し、盧文進等亡入漢人の嚮導も手傳つて、年と共に益々苛烈さを加えた。特に「同光之世爲患尤深」と云ふ如く幽州方面は契丹の寇掠に殆んど寧日なき有様であつた。

## 五

前二項に於いては、光啓中から太祖即位九年迄の中國と契丹との政治・國際關係に就いて述べたが、以下此れに基いて、更に此の間に於ける漢人・漢文化の契丹への流入に就いて考察し、漢城の成立・存在意義等に就いて論ずることとす

はじめは劉仁恭強盛にして北辺の守り固く、古北口に近づいた契丹は却つて仁恭に逆撃され、渝關に於いては述律阿鉢（蕭敵魯）は守光に擒えられ重賂を納れて盟を請い始めて許される等、契丹は殆んど侵入の目的を果さず、しばらくの間契丹の侵寇は見られなかつた様である。従つて其の目的とする中國の財寶・子女の掠奪は僅少であつたと見るを得よう。然し此の間全く契丹の得る所がなかつたわけではない様に思われる。<sup>註28</sup>而して北辺無事と云われる和平の間、契丹の朝貢記事は全く見當らぬ、唐朝への朝貢は絶無であつたとしても幽州と何等かの關係がなかつたかどうか、此處に注意す可きは契丹と幽州との盟約である。先に引用した如く「以良馬賂仁恭。以市牧地」と云い「納馬五千以贖之。不許。泌丹乞盟納賂以求之」と云える如く契丹は仁恭に良馬を賂して牧地を市い。又馬五千匹を送つて許されず更に賂を納れたと云うが、其賂には更に多くの馬其他を賂つたと考ふる事が出来る。受身の立場に立つ契丹が馬の代價として絹類（雲中の會盟には克用金繒數萬を賂り、契丹又馬三千匹・雜畜萬計を以て之れに酬いて居る）を受けける事はなかつたとしても、幽州としては唐宋五代藩鎮の兵力として最も重要な馬を得た事は、其の戦斗力に資する所が大であつた。<sup>註29</sup>盟約以後に於いて兩者の間に如何なる交渉が行われたか窺知し得無いが、中國の財寶・文物を憧憬する契丹と、塞外の馬を垂涎する藩鎮幽州との間に交易關係が存在しなかつたと斷言し得るであらうか。

幽州侵入に失敗した契丹は、天復三年頃から主鋒を轉じて西北辺張家口・獨石口方面に侵入を開始した。契丹が轉じて中國の山後方面を伺うに至つた理由としては、

- 1 古北口・渝關の地は一夫百夫を守る堅固な天然の要害で、其の侵入も容易でなく、<sup>註30</sup>加うるに幽州としては古北口・渝關の守りを失えば一路平原を迅驅する北虜に直ちに會府幽州を衝かれる恐れがある爲め其の守りには相當の努力を拂つたのであらう。（それに比して獨石口・張家口方面は幽州・太原に達する迄には更に内長城線の固めがあ

り、山後の地は人口も稀薄で奚・吐谷渾等蕃族の雜居する地であつた)

2 古北口方面の長城外の地は奚族の本據で、契丹が侵入するには叛服常ならぬ奚の中を通らねばならなかつた。註

3 張家口外の地は地味肥沃で牧馬に便にして、特に契丹侵入の點兵點たる鴛鴦泊註も在る。

4 契丹の西方諸遊牧民族との交渉、それへの侵入にも便利であつた事。

等が揚げられる。太祖は天復二年以來代北方面に侵入し、盧龍の巡屬山後地方を掠め、度々劉仁恭と兵を交え、又李克用と會盟して仁恭に備え、黑車子室韋も天祐元年より即位三年に至る數回の攻略によつて全く降し、背後の固めを爲すと共に交通路侵入路の安全を計つた。開平元年(即位元年)立つた劉守光に對しては、彼の援兵の請願にも應ぜずして、却つて其の混乱に乗じて抄略をほしのままにした。遼史卷一太祖紀には、

以兵四十萬。伐河東、河(代)北。攻下九郡。獲生口九萬五千。馳馬牛羊不可勝紀。

とある。此の數字等の誇張である事は先述したがそれにしても決して少い數ではなかつた。同書に續いて、

明年(天復三年)十月。引軍略至薊北。俘獲以還。

(天祐二年)。及進兵擊仁恭。拔數州。盡徙其民以歸。

是歲(即位六年)。以兵討兩冶。以所獲僧崇文等五十人歸西樓。建天雄寺居之。

と見える如く、彼の侵略には莫大な漢民其他の獲得が伴つて居た。「洎周德威攻圍幽州。燕之軍民多爲所寇掠」(舊五代史契丹傳)と云える如く俘獲を明記して居ない侵入にも多かれ少かれ掠奪が行われて居た事は自明の理である。掠奪と共に軍民の亡叛もあつた。舊五代史卷一契丹傳には

劉守光末年苛慘。軍士亡叛皆入契丹。

と記して居る如く、守光末年の苛政に堪えかねて燕の軍士は多く亡叛して契丹に入つたと云うが、先述の如く劉守奇は既

に開平元年平州より渝關を越え其衆數千人を率いて來奔し、太祖の二十一功臣の一人たる韓延徽は乾化二年頃(即位七年)契丹に使用して其のまま<sup>註三</sup>貞明元年(即位九年)幽州の軍校齊行本、其族・部曲男女三千人を率いて來降し、貞明二年(神冊元年)には盧國用來降し、貞明三年(神冊二年)には盧文進新州より來奔する等<sup>註四</sup>。有名將吏の亡入でも數人を數え得る。況んや無名軍民の亡入は多數に上つたと考えられる。守奇・行本は間も無く中國に歸つたが、その率いて居た漢民の止つて居る者は多かつたのであろう。漢民の亡叛は契丹傳には守光の末年として居るが、守奇は幽州の惡政・内訌によつて契丹に奔つたものと推測されるから、斯るすう勢は仁恭の末年天祐三、四年頃から生じて居たと見るを得よう。

此等の俘獲亡叛の漢人は、或は戰賞として各部軍將にも與えられたであらうが、大部分は太祖自身太祖一族の手に歸したに違いない。遼史<sup>卷七</sup>地理志・東京道・龍化州の條の

天復二年。太祖爲迭烈部夷離菴。破代北遷其民。建城居之。

とあるは其の掠奪漢人の處置を傳えた記事である。此れが現在傳わる契丹の最初の徙民建城の記録で、此處に吾々は明らかに太祖によつて行われた大規模な徙民政策の萌芽を見る事が出来る<sup>註五</sup>。而して斯る莫大な俘獲漢民が單に龍化州にのみ置かれたとは考えられない。其他に此等俘民を選した所が當然存在す可きである。俘獲漢民の置かれた場所として先づ四樓<sup>註六</sup>があげられる。東樓は龍化州であるが、西樓上京臨潢府については先に擧げた如く、即位六年兩治を討つて僧崇文等五十人の處置が傳えられ、南樓たる永州については、遼史<sup>卷三</sup>地理志・中京道の條に、

武安州。……太祖俘漢民居木葉山下。因建城以遷之。號杏塢新城。

とある。漢人が木葉山(永州に在り)下に徙されたのは太祖の何時の頃か不明であるが、徙民政策が組織化され急激に發展する神冊以前とは考えられないだろうか。かくて先づ遷民の地として選ばれたのは四樓であつたとの想像は許されよう。次に徙民の地として考えられるのは宗白の續通典に云う所謂漢城である。此の地は當時の太祖の主要なる中國進寇路

上にあると同時に又歸還路に當る。中國に侵入し多くの漢民を俘獲した太祖が、其の歸還路上の交通の要地に當り、而も地味の肥沃な此の地に漢民を徙し建城した事は當然の事である。此の漢城の北には羊城が在つて權場貿易場となつて居た。此の羊城が鎮東海口の長城の如く純粹の防禦用の城か、居住地としての城かは判然としないが、恐らくは兩方兼ねたものであり漢人の住居地でもあつたらう。

次に貿易に就いて述べる。掠奪と共に遊牧民族の主要な富蓄積の手段となるものは貿易である。古來、漢・遊牧兩民族の對立に於いては、戰鬪状態に在る時（多くは遊牧民の侵入）以外の所謂和平の状態では、程度の差はあつても朝貢・貿易が行われるのが普通である。先述の如く、契丹と中國の關係は、幽州の場合には天祐三年迄契丹の侵入續き、即位元年以後には契丹の抄略は在つても幽州側は却つて求援の使者を送つて居る程である。又河東の李氏は、天祐元年の雲中の會盟以來神冊のはじめ迄は、根本的には對立の危機をはらんで居たと云え邊外無事であつた。契丹としてもあたかも内部混亂の危機に立つて居た時であり、一時の侵略は致し方ないとしても、外敵と事を構える餘裕なく、寧ろ平和的手段たる交易による漢人・漢文化の攝取を望んで居たであらう。果して遼史卷一太祖紀に、

三年（即位）五月甲申。置羊城于炭山之北。以通市易。

とあり、同書卷六食貨志に、

征商之法。則自太祖。置羊城於炭山北。起權務。以通諸道市易。

とある如く。太祖は即位三年五月には羊城を炭山之北に置き權場貿易を司らしめたのである。羊城は炭山の北、宋白の云う漢城の西北に當る。契丹本土より中國に通ずる二大交通幹線註七の一つは、遼の首都臨潢から今の經棚、元の上都の地を經、張家口又は獨石口を通つて中國に入る交通路であるが、羊城は其の線上の要衝に當る。臨潢↓上都の幹道は此の羊城附近で張家口路と獨石路との二つに分れて居た様である。更に西方に在る鶯鶯泊は契丹軍中國侵入の點兵地であつた。要

するに羊城は中國と契丹とを結ぶ交通路、換言すれば貿易路、漢人、漢文化の流入口の要地であつた。此の地は遼代のみならず金代に於いても北方の牧畜を易う可き好恰の權場貿易場となつて居たことは、金史<sup>卷五</sup>○食貨志・權場の條に、

國初於西北招討司之燕子城之間。嘗置之。以易北方牧畜。

とあることによつても知られる。<sup>註88</sup>

羊城が置かれたのは、即位三年五月であるが、それ以前に於いても兩者の交易は行われて居た。舊五代史<sup>卷四</sup>梁紀に、

開平二年正月。幽州劉守文。進海東鷹鷂蕃馬氈罽方物。

とある。此の守光が後梁の太祖に奉つた海東鷹鷂・蕃馬・氈罽は中國内地の産物ではなく、北方蕃部所産の物であるから、守光が契丹（其他の蕃族）から得たものに違いない。即位二年八月の守光の契丹への進奉に見る如き使節の往來もあり、此等が總て貿易によつて得たものと限らぬが、即位三年以前に於ける契丹と幽州との交易關係を推測せしむるに充分である。従つて一般人の交易は早くから行われて居たものと考えて誤りあるまい。さればこそ太祖は權場を設けて商し征て其利を獨占し、又それを盛んにせんとしたのである。舊五代史<sup>卷一</sup>劉守光傳に、

大燕地方二千里帶甲三十萬。東有魚鹽之饒。北有塞馬之利。我南面稱帝。誰如我何。

とて、劉守光が幽州に塞馬之利ありと豪語したのは斯る交易關係を反映したものである。宋白の云う漢城も亦貿易を通じ見る時大きな存在意義を有するものと云えよう。

## 六

以上によつて、契丹勃興前後に於ける中國と契丹との關係、漢城・羊城の成立、存在意義が明らかになつたと思うが、要するに、太祖の漢城・羊城の設置には中國への侵入・貿易路の據點を抑え、契丹勃興の最大要素たる漢人・漢文化の獲

得を獨占せんとする明瞭なる企圖を伺うことが出来るのである。

註1 建國の説話に論及された論文としては、松井等氏「契丹勃興

史」(滿鮮地理歴史研究報告第一以下「滿鮮地歴」と略す)

箭内互氏「遼代の漢城と炭山」(蒙古史研究所收)。橋本増吉

氏「遼の建國年代に就いて」(史潮第六年第一號)。「舊五代史

契丹傳に就いて」(東洋史研究第二卷第一號)。小川裕人氏

「橋本増吉氏の「遼の建國年代に就いて」を讀む」(東洋史研

究第一卷第五號)。「遼の建國に就いて」(東洋史研究第二卷第

三號)。「遼室君主權の成立に關する一考察」(東洋史研究第三

卷第五・六號第四卷第一・二號)。田村實造氏「遼初史釋疑三

題」(東洋史研究第三卷第二號)。島田正郎氏「遼の部族制度に

就いて」(歴史學研究第九八號)。等がある。松井氏(箭内氏)

は新五代史以下にある塩池會飲のことは潤飾であるとして退

け、他の事件は信じ、此れを神册元年の前年の事件とされ

る。小川氏は八部大人誘殺事件は太祖の即位三年十月から四

年七月迄の間に起つた事件で、遼史は此れを抹殺したとされ

る。此の三者が漢城を灤河上源の宋白の云う漢城に比定され

るに對し、田村氏は、漢城即ち上京臨潢府であるとされ、更

に「やがて九年の間に八部を併合し、ついで起つた迭剌部内

同族の叛亂をも鎮壓して……」との見解を示され、島田氏は

漢城についての見解は示されなかつたが、「八部長鑿殺事件

の、歴史的事實として認め難いことは改めていふまでもない

が、要するにそれは從來各部の有した絶大な權力を抑制し

て、八部を自己の掌中に收めるに至つた過程を、説話的に潤色したものと解することが出来るであらう」とされて居る。

2 註1の諸論の外に姚從吾「說阿保機時代の漢城」(國學季刊

五の一)がある。漢城決定の論據となつたのは、宋白の續通

典の「阿保機居漢城。在檀州西北五百五十里。城北有龍門

山。炭山西是契丹室韋二界相連之地。其地灤河上源。西有塩

泊之利。則後魏滑鹽縣也」の記事と、新五代史以下に見え

る鹽池の存在である。第一に宋白が漢高祖實錄の記す古漢城

を灤河上源の漢城と斷定したのが的確であつたか否か、第二

に漢高祖實錄に「俄設策復併諸族云々」とあるのが新五代史

には「鹽池會飲」の事件となつて居る、此の新五代史の記事

は撰者の作爲(「西有鹽泊之利」と「設策云々」とによつて作

爲された)とするか否かの解釋何如によつて異説を生じてい

る。

3 津田左右吉氏「遼の制度の二重體系」(滿鮮地歴第五)。田村

實造氏「遼代に於ける徙民政策と都市・州縣制の成立」(滿

蒙史論叢第三)。島田正郎氏「遼の頭下州に對する二、三の

臆測」(歴史學研究七〇號)。安部健夫氏「元代「投下」の語

源考」(東洋史研究第三卷第六號)。等参照

4 拙稿「遼初史の二三の問題について——太祖の奚經略と其意義

——」(西日本史學第六輯)。

5 註4に同じ。

6 舊唐書<sup>七一</sup>牛僧孺傳、資治通鑑<sup>四二</sup>太和五年正月庚申の條參照。

7 資治通鑑<sup>六三</sup>天復三年末の考異に「薛居正五代史及莊宗列傳皆云。光啓中守光禽舍利王子。欽德以重賂贖之。按是時仁恭猶未得幽州也。今從薛史蕭翰傳及王暉唐餘錄」とある。

8 資治通鑑<sup>六一</sup>には乾寧四年七月の條に繫く。

9 舊五代史<sup>三五</sup>劉守光傳。新唐書<sup>卷二</sup>劉仁恭傳。資治通鑑<sup>六六</sup>開平元年三月の條參照。

10 遼史<sup>卷一</sup>太祖紀に「九月（天祐元年）討黑車子室韋。唐廬龍軍節度劉仁恭發兵數萬遣養子趙霸來拒。霸至武州。太祖諜知之。伏勁兵桃山下。遣室韋人牟里詐稱其酋長所遣約霸兵會平原。既至。四面伏發擒霸殲其衆。……（明年雲中會盟の後）及進兵擊仁恭。拔數州。盡徙其民以歸。明年二月復擊劉仁恭。」とある。

11 松井等氏「五代の世に於ける契丹」（滿鮮地歴第三）。には光化二年以前とされ、小川氏・橋本氏前掲論文には天祐三年頃とされて居る様である。此の(c)の事件と同一事件を傳えたものは、舊五代史<sup>八九</sup>蕭翰傳の「蕭翰者。契丹諸部長也。父曰阿巴（鉢）。劉仁恭鎮幽州。阿巴曾引衆寇平州。仁恭遣驍將劉厲郎與其子守光率五百騎先守其州。阿巴不知爲郡人所給。因赴牛酒之會。爲守光所擒。契丹請贖之。仁恭許其請。尋歸阿巴。妹爲安巴堅妻。則契丹主德光之母也。」又唐餘錄の（通鑑所引）「乾寧中劉仁恭鎮幽州。保機入寇。仁恭擒其妻兒述律阿鉢。由比十餘年不能犯塞下」の二つである。更に遼史によ

れば蕭翰の父は蕭敵魯であるから、實里王子述律阿鉢と蕭敵魯は同一人となる。次に遼史には敵魯に關しては此の平州事件の事は全く見えないが、遼史<sup>卷七</sup>蕭敵魯傳に「五世祖曰胡母里。遙叢氏時嘗使唐。唐留之幽州。一夕折關遁歸國。由是世爲決獄官。」とある。更に遼史<sup>卷四</sup>韓知古傳に「韓知古：太祖平薊時知古六才。爲淳欽皇后兄欲穩所得。后来嬪。知古從焉。」とあり、知古は既に即位三年には龍化州大廣寺に碑を建て功德を紀して居る。此等の記事を其まま信ずるわけではないが、蕭氏は早くから漢人と深い關係を持つていたのではないかとの暗示を與えるものである。

註10參照。

12 資治通鑑<sup>六七</sup>乾化二年正月の條參照。

13 松井氏「五代の世に於ける契丹」。

14 拙稿「遼初史の二三の問題について——太祖の奚經略と其意義——」參照。

15 資治通鑑<sup>六八</sup>乾化三年三月乙丑の條に「晉將劉光濟克古北口」とある。これは契丹軍の入援路或は燕人の亡命路を絶たんとする作戦と見られる。

16 資治通鑑<sup>六九</sup>貞明二年十二月の條に同様の記事あり。

17 遼史<sup>卷三</sup>地理志・東京道・祖州の條に「越王城・太祖伯父于越王述魯。西伐黨項吐渾。俘其民放牧於此。因建城。在州東南二十里。戶一千。」とある。此の記事に就いては嚴密な批判を必要とし、今此處でふれる紙數はないが、要するに天復以前に於ける契丹の河東方面侵出を暗示するものと臆測する。

- 19 田村氏「遼初史釋疑三題」。
- 20 黒車子室韋の住域に就いては「突厥の復興に就いて」（岩佐精一郎遺稿所載）による。
- 21 松井氏「契丹勃興史」。津田氏「遼の制度の二重體系」。小川裕人氏「遙輦氏傳說成立に關する史的考察」（滿蒙史論叢第三）。參照。
- 22 天祐元年說二新唐書二八沙陀傳。天祐二年說二唐太祖紀年錄（通鑑六六二考異所引）・舊五代史六六二武皇紀・新五代史四四唐紀本紀・遼史卷一太祖紀。天祐四年說二舊五代史三七一契丹傳・莊宗列傳（通鑑六六二考異所引）・通鑑六六二開平元年五月の條。
- 23 小川氏「遼の建國年代について」
- 24 松井氏「五代の世に於ける契丹」
- 25 舊五代史六六二武皇紀下。新唐書一八沙陀傳。資治通鑑六六二天復二年三月の條。
- 26 資治通鑑六六二乾化元年六月の條。
- 27 契丹の神冊建元の事實に就いては疑問もある様であるが、遼史其他の神冊建元の事實は認む可きである。
- 28 註11及び13參照。
- 29 日野先生「五代の馬政と當時の馬貿易」（東洋學報二九卷第一・二・三・四號）參照。
- 30 資治通鑑六九二貞明三年二月の條に、「初幽州北七百里有渝關。……每歲早獲清野堅壁以待契丹。契丹至輒閉壁不戰。俟其去選驍勇據隘邀之。契丹常失利走。……由是契丹不敢輕入寇。及周德威爲盧龍節度使。恃勇不修邊備。遂失渝關之險。契丹每芻牧於營・平之間。」とあり、同書同條所引の金虜節要には「此數關（古北口・松亭關・渝關）皆天造地設。以分藩漢之限。一夫守之可以當百。」とある。
- 31 拙稿前掲論文參照。
- 32 遼史四兵衛志參照。
- 33 通鑑六九二貞明二年十二月。契丹國志三一述律皇后傳。松井氏「五代の世に於ける契丹」參照。
- 34 齊行本・盧國用については遼史卷一太祖紀即位九年。盧文進については遼史卷一太祖紀。通鑑六九二貞明三年二月。舊五代史七九盧文進傳。契丹國志盧文進傳等參照。
- 35 徙民政策については田村實造氏「遼の徙民政策と都市州縣制の成立」。鳥田正郎氏「遼の徙民政策に就いての「私見」」。史學雜誌第五十三編第二號）。小川氏「遼室君主權確立についての一考察」等參照。
- 36 拙稿「遼初史の二三の問題について——太祖の四樓——」（東洋史學第三輯）參照。
- 37 交通路については、松井氏「宋對契丹の戰略地理」（滿鮮地歴第四）。田村氏「遼宋の交通と遼國內に於ける經濟的發展」（滿蒙史論叢第二）による。
- 38 箭内互氏「遼代の漢城と炭山」。
- 補、鳥田正郎氏は「遼代社會史研究」の中で建國説話・漢城・神冊建元等の問題について論及され、從來の論争に一應の解決を與えられている様である。

Relation between *Kitai* 契丹 in the Rising Period and China

—Especially on *Han-Chêng* 漢城—

By K. Hirashima

Studying the relation between *Kitai* and China before and after the rise of *Kitai* (A. D. 841—916), we find the following facts: 1. Till about the time of *Kuang-Ch'i* 光啓 (A.D. 885), *Kitai* brought the tributes to China only several times. 2. Till about the first year of *T'ien-Fu* 天復 (A. D. 901), even if *Kitai* made several invasions into *You-Chu* 幽州, they were defeated by *Liu* 劉, *Chieh-Tuo-Shih* of *You-Chou* 幽州節度使. Till this time, the influx of *Hanians* and *Han* civilization into *Kitai*, which was a great factor of the rise of *Kitai*, is scarcely found. 3. However, after the second year of *T'ien-Fu* in *T'ang*, *Kitai*, changing their way, invaded *Ho-Tung* 河東 direction, plundered *Hanians*, beasts, treasures, and accepted *Hanians* who exiled themselves on account of wars. They set up, too, a sort of custom house (權場) and traded with China. It is *Yang-Chêng* 羊城 or *Han-Chêng* 漢城 that *A-Pao-chi* 阿保機, the unifier of the race of *Kitai* and the founder of *Liao* 遼 Empire, established at the important position on this invasive, communicative and trading route. This *Chêng* was a burgh for living of *Hanians* as well as a castle for defending and watching, and therefore I think that it played a great rôle in the founding of the Empire by *A-Pao-Chi*.